The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	哲学プラクティス(カウンセリング)国際学会に参加して
Author(s)	中岡, 成文
Citation	臨床哲学. 1999, 1, p. 79-90
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5368
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

海外事情（１）

哲学プラクティス（カウンセリング）国際学会に参加して

中岡成文

１．哲学プラクティス――学会の概要

第４回哲学プラクティス国際学会が昨年８月３日から７日まで、ドイツのケルンに近いベルギッシュ・グラートバッハで開催された。テーマは「哲学プラクティスと徳」である。

この学会には、配布された参加者名簿によると、地元ドイツ、その他のヨーロッパ各国（イギリス、オランダ、フランス、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、スイス、イタリア、オーストリア）、北米（合衆国、カナダ）、ブラジル、イスラエルなどから、１７３名が参加した。台湾からの参加者１名（フレミング氏）を除けば、アジアから参加したのは私を含む阪大文学部の４名（臨床哲学教授・中岡成文、助手・本間直樹、院生・紀平知樹、同・仁平雅子）だけである。そして、日本からは明らかに初めての参加であり、また初めての研究発表（中岡）であった。（なお、以下の人名の表記は、たとえば北欧の人の場合など、正確を期せないことをお断りし、叱正を歓迎する。）

日本の臨床哲学は鷲田清一によって提唱され、大阪大学文学部を中心に、現在までのところとりわけ医療・看護・教育の現場との交流のもとで展開されつつある。「哲学プラクティス」（philosophical practice、独 Philosophische Praxis）という領域ないし活動様式は、この臨床哲学との対比でおおまかにいうと、カウンセリング（個人相手、もしくは企業など集団相手）を行うということが主要な特徴であり、ここからまた心理学的カウンセリングとの差異化に、哲学プラクティスが大きな関心を注いでいることも理解できる。プラクティスを開業している人を英語では端的に「哲学カウンセラー」とも呼ぶ。

学会が開かれたトマス・モールス・アカデミーというカトリック系の学術施設は、ケルンにほど近いベルギッシュ・グラートバッハにある。ベルギッシュ・グラートバッハは、1981 年にＧ・アーヘンバッハ（今大会の主催者）が哲学プラクティスを創始し、かれのクリニックを開業した場所であり、その意味で哲学プラクティスの誕生の地といえる。昨年の第３回国際学会がニューヨークで開かれたおり、アーヘンバッハがかなり強引に、今大会を「徳」というテーマで、かつ自分のお膝元で開催するよう、招致したら

しい（かれ自身の今回の開会講演による）。

今大会のプログラムでは、連日夕食後にまで２コマのスケジュールが組まれていて、ついていくのは重荷ではあったが、ヨーロッパの学会ではこれは日常的と覚悟すべきであろう。その間をぬって、食事やコーヒーブレークのときに活発に情報や意見を交換したし、また後述のように計５人（４組）の参加者に哲学カウンセリングについてインタビューし、その模様をビデオに撮ることができた。同行の助手・院生諸君も話しかけられたり、自分から質問したり、それぞれ積極的に会に参加して、臨床哲学の現状をふまえて発信するとともに、臨床哲学発展に向けての刺激を受けた様子であった。

参加者の中で女性の占める割合は相当に高かったし、イスラエルのシュスター、カナダのフォン・モルシュタインなど会議を主導する発言をし、一目置かれている女性も少なくない。学会の使用言語は英語とドイツ語で、主要な講演には同時通訳（つまり、英語の講演ならドイツ語の通訳、ドイツ語ならその逆）がついた。講演テクストは基本的には事前に提出しているので、それを参照するとはいえ、しばしばアドリブも入るなかで、哲学・思想系の用語を直ちに別の言語に置き換えてみせるドイツ人通訳者の技量と内容理解力は賞賛すべきであった。日本の哲学・思想系の会議でこのような水準は、現在望めるのかどうか。

２．講演と交流

１日目（８月３日）

少々事情があって、われわれ日本からの一行が会場入りしたときは、すでにプログラムが始まりかけていた。まず、共同主催者であるトマス・モールス・アカデミー所長とアーヘンバッハ氏の二人から「開会の辞」が述べられた。続いて、アーヘンバッハ（仁平さんは最後には「アーヘンさん」と呼んでいた。今は亡くなった中川米造さんに雰囲気が似て、親しみを覚えたという）が「哲学プラクティスと徳」と題する講演を行った。かれのドイツ語は声低く、部分的に不明瞭なうえ、内容的にも文飾が豊富でかなりあくが強く、私は正直いってごく断片的にしか聞き取れなかったが、テクストが販売されていたので、後からそれで理解を補うことができた。なお、アーヘンバッハの経歴について付け加えておくと、かれは1981年にO・マルクヴァルト（ドイツの解釈学や実践哲学をリードする学者の一人）のもとで博士号を取得し、同年哲学プラクティスを開業。現在、「国際哲学プラクティス協会」の会長である。アーヘンバッハに続いて、「徳、動揺する価値と経済」（チューリッヒ大学教授H・リュッベ）、「実践倫理に対する徳の意義」（ノルウェー・トロムソ大学教授A・リンドセット）、「人生を生きること」（ベルリン大

学教授Ｖ・ゲアハルト）という３つの講演が相次いで行われた。それぞれに興味深い点があったが、とくに後でも触れるリンドセットは、医療系学部に奉職していることもあって、医療研究者との交流が多く、医師たちに「注意深さ」という徳を示唆し、かれらが性急に振る舞わぬよう戒めるべきだと述べていたのが、私には共感できた。

それらの終了後、夜の９時からベルギッシュ・グラートバッハ市のレセプションがコンサート付きで開かれ、ベートーベンの協奏曲が奏でられた。曲が終わっても会は終わらず、ビール（きっと樽生なのだろう、おいしかった）やワインを手に歓談が真夜中ごろまで続いた。ニューヨーク市立大学のルイス・マリノフ（Louis Marinoff）とかれの今度出版される本について話し、またオーストラリアのある大学の看護系学部から来ているＳ・ヴァン・フーフト（Stan van Hooft）とも言葉を交わすことが出来た。マリノフはそもそも私がこの国際学会を知るきっかけを作ってくれた人である。というのも、昨年12月にインターネットで哲学プラクティス関係のことを調べていて、かれのホームページに行き当たり、そこに過去３回の国際学会のプログラムが載せられているのに興奮し（「哲学カウンセリングがもう国際学会を３回も開催している！」）、マリノフにメールを出して、今回大会がドイツであるという情報を得たからである。ヴァン・フーフトについては、かれの「ケアリング」についての本を臨床哲学関係の授業の種本に使わせてもらっていたので、こんどの機会にぜひ話したいと思っていた。

なお、時間が前後するが、この初日の午後の休憩時間には、前述のとおりメール上ではすでに知り合っていたマリノフと初対面の挨拶を交わすことができた。マリノフはアメリカでの哲学プラクティスの中心人物といっていいのだろう、この国際学会に関しても、第１回（まだかれがカナダのブリティッシュ・コロンビアにいたとき、イスラエルのラハヴと共催）と第３回（ニューヨーク）の主催者となっているし、今大会では最終日最終講演（トリをとるというやつか？）を務めることになっている。今回、アーヘンバッハと並んで私が最も注目していた一人である。アカデミックな地位としてはニューヨーク市立大学の哲学準助授であり、「アメリカ哲学・カウンセリング・精神療法協会」（ASPCP）会長を務め、マンハッタンのある本屋で「哲学フォーラム」という名の哲学カフェを月例で開いている。しゃべり方は精力的。妻子を帯同しての参加はかれくらいのものである。　それからもうひとつ、この日の休憩時間、マリノフと話した後だったと思うが、ふと見ると紀平君と仁平さんが二人の男性と何やら話し込んでいる。輪の中に入ると、かれらはノルウェーのオスロで哲学プラクティスを開こうとしているグループに属していることがわかった。２年間カウンセリングの訓練を積んできて、いよいよ料金を取る本格的な営業（？）に移ろうかというところらしい。阪大の二人が的を得た質問をしたり、日本の現状について臆せず答えたりしている様子が頼もしかった。オスロ

の二人には、後にインタビューをすることになった。

休憩時間には、また、台湾から参加しているＪ・フレミングから話しかけられ、イギリスのデュ・ポロックに紹介された。デュ・ポロックは精神療法に造詣と問題意識が深いらしく、阪大の臨床哲学という言葉と、その現在の方向性のひとつが看護の現場との接触であること（看護に＜ことば＞が欠けていることへの看護者の悩みに理論的にコミットすること）を私から聞いて、疑問付きではあるが関心を示してくれた。

２日目（８月４日）

朝食のとき、主催者のアーヘンバッハがあちらから挨拶をしに来てくれ、晩に自宅に招きたいむね申し出てくれたのは、ありがたかった。その前だったと思うが、以前から名前を知っていたイスラエルのＳ・シュスター女史（イスラエルの人の名では私は性別を判断できず、女性だとは思っていなかった）とも同じテーブルに座り合わせ、話をした。かなりゆっくりした、柔らかな英語をしゃべる。しかし、彼女に強靱な主張の裏付けがあることは、最終日のマリノフの講演に対する立ち上がっての抗議で明らかになった。彼女には翌日インタビューできたので、経歴などはもっと先の箇所に譲る。この朝食のときのシュスターとの会話で覚えているのは、われわれの臨床哲学のことを紹介すると、ただちに「臨床」（英語で clinical）というネーミングについて意見を述べ、そのままでは誤解されやすいので、「臨床的な志向をもつ哲学的プラクティス」とでも変えればいいのではないかと提案してくれたことである。その名前ではちょっと長すぎるかもね、と私は冗談めかして受けたが、臨床哲学についての質問はこれからも諸方から飛んでくるだろうという予感はした。意外だったのは、私がイスラエルの哲学プラクティスの中心人物だと思っていた（論文もかなり発表しているし、第１回の国際会議をマリノフと共催している）ラハヴに、シュスターはたいへん距離感をもっていて（それどころか反目がある印象）、最近うわさもきかないという冷たいコメントしか、かれについてはしなかったことである。もうひとつおかしかったことに、ラハヴのことを私は女性だと思いこんでいて、「彼女は」と繰り返し言うと、シュスターは「ラハヴは男です。ひげもありますよ」と笑い出した。イスラエルについて、また哲学プラクティスの実践家たちについて、私に情報がなかったからこんな初歩的な勘違いをしてしまう――といえばそれまでだが、国際学会に出るような学者は男だと思いこむジェンダー・バイアスが私にあるのも確かだ。

さて、２日目の催しは、コロキウム「哲学カウンセラー（プラクティス開業者）の徳」で幕を開けた。（ただし、このコロキウムと並行して３つのワークショップや講演が開かれた。これは他の日も同様である。日本からの４人はできるだけ分散して、たくさんの

催しに触れるように努めた。私は自分の出た催しについて紹介することにする。） 司会はアーヘンバッハ、パネリストにはエルサレムのＳ・シュスター（先ほど朝食で会った人）、オランダでクリニックを開いている（そしてその収入だけで生活できる例外的なカウンセラー）Ｗ・フス、ドイツのオランダ国境近くの街で10年ほどプラクティスを開いているＦ・ゲーブラー、前述のノルウェーのリンドセットなどが並んだ。最初は聴衆の中（最前列の私の隣り）にいたカナダのカルガリー大学教授のＰ・フォン・モルシュタイン女史も、途中休憩の後は雛壇に加わったことを言い添えておこう。英語があまり得意ではないらしいアーヘンバッハは、同時通訳がつかないこのコロキウムでは、特殊な英語にはときおり詰まるらしく、話者もしくはモルシュタインにその言葉の説明を求めていた。

シュスターはかなり政治的な趣旨のことを訴えていた。それも二重の意味でそうなので、一方では、国際人権宣言に哲学プラクティスはコミットするべきだと述べ、他方では哲学プラクティスを権威付けすることはやめて、自由にプラクティスに取り組むべきだと主張したのである。この時点では聴いていてそれと分からなかったが、プラクティスの権威付けとは、アメリカのマリノフらが目指している国家資格への動きを念頭に置いていたらしい。司会のアーヘンバッハの表現では、哲学プラクティスの「制度化」の非をならしたことになる。

ゲーブラーの提題にはとりわけ目新しさはなかった。ただ、かれについてあらかじめ配布された紹介では、合気道の道場を開いているとあったので、４日目の休憩時間にかれに尋ねてみたが、たとえば合気道をカウンセリングと融合するような、新奇なメソッドの開発を狙っているのではないらしい。ともかく、従来の西洋中心主義を牽制するためにも、「東洋」の文物に敬意を払う必要があるという漠とした認識は、かれ以外の人々にもかなり（少なくともこの学会・グループでは）広くうかがえた。これを「オリエンタリズム」と批判的にくくる向きもあるかもしれないが、個性を無視してひとからげにすることには疑問を覚える。

次に、リンドセット（前日の講演者が再び登場した）の提題。ノルウェーでクリニックをやっているが、クライアントを何と呼ぶかにはいつも困る、「対象人物」と呼ぶのがノルウェーのひとつの習慣だがこれは問題で、ほんとうはアーヘンバッハがするように「ゲスト」と呼ぶのがいいと思う。来るゲストに主人は食物を贈与するのだが、客は逆に自分自身を贈与してくれるのである。そこで、注意深くゲストを評価してあげることが大事なのだが、じっさいに来るゲスト（つまりクライアント）は自分を厄介者だと感じている。ゲストを贈与として受け入れることが哲学プラクティスにとって重要である。リンドセットは、後に交わすことができた会話から察しても、私心のない人柄の持ち主と

察せられ、ここでの「ゲスト」論はなかなか聞きごたえがあった。ただし、受容的精神という基本はたしかに大切で、強調してもしきれないものであろうが、それだけではやや単純すぎる。昨年の６月、７月の阪大の臨床哲学の講義（鷲田教授担当）に出ていた人なら、「ホスト」という言葉の二重性（この言葉ががんらい「主人」と同時に「敵」をも意味していた）についての鷲田さんの指摘を思い出すだろう。はたして、というか、司会のアーヘンバッハがさっそくリンドセットの立論に介入して、「客を特権化するのは問題がある。ことわざでは、客は逗留４日目には客でなくなるともいうし、とにかく主人こそが客を客として遇する・扱う存在（ドイツ語の Gastgeber の geber の部分を強調）であることを忘れてはならない」とコメントしたのは、さすがに哲学プラクティスの創始者にして最有力者らしい練達・鋭敏さだと私は感服した。

次の提題者のフス（Heutz）は、風変わりな印象を与える。学者らしくないのは、その長髪のせいというより、容貌に知的な気負いとか緊張のようなものが浮かんでいず、リラックスして、少し悲しげにさえ見えるためだと思う。かれは開かれた心を持つよう、諄々と訴えた。「自分自身と友好的であること」を、かれは心の静安（serenity とか tranquility）と表現した。メディテーション（瞑想）に傾いているところは留保するにしても、私が前から掲げている「自己コミュニケーション」という発想と相通じると思ったので、熱心に聴いた。

提題が一回りした後の質疑応答は、「ゲスト」問題が中心となった。クライアントと呼ぶのがいいか、ゲストと呼ぶのがいいか、意見はほぼまっぷたつに分かれた。クライアント派は、お金をとっている以上、クライアントと呼んで何が悪いという。妙に客を持ち上げなくても、最初からカウンセラーと客は同格に決まっているのであり、金をもらうことであまり気を使う必要はない、とさめた発言をする参加者もいた。

ところが、お金をもらうことにこだわりを感じる人は相当にいるようで、質疑はしだいに紛糾していく。そのきっかけを作ったのは、（名前は後で知ったが）A・ストプチュク（Stopczyk）という女性である。彼女は自分もプラクティスを始めようとしているが、お金をとることにどうしてもためらいがある。それによってお金がもらえる哲学的な仕事とはいったい何なのか、先輩のカウンセラーたちの教示がほしい。この問題で多くの人に相談してみたが、みんな悩んでいるんです。この質問に対するアーヘンバッハの答えは私にはよく聞き取れず、理解できなかったが、他の提題者も真剣になって意見を言い始めたので、彼女の質問がひとつの核心を突いたことは感じられた。それはたぶん青臭い質問で、プラクティスをやっていき、試行錯誤と自問自答を重ねるなかで、おそらく当のカウンセラーにしか通用しない形でのみ、答えを許す性質のものなのだろう。ともかく、ストプチュクは誰の答えにも納得しようとせず、同じ根源的な問いを投げかけ

つづけた。私は素人くささを貫くその態度に関心をもち、できたらインタビューしてみたいと思った。これはすぐ後で実現する（なお、彼女の著作は本号で書評されているので、参照していただきたい）。

ディスカッションの中でもうひとつ提題者(つまり国際的に有力な哲学カウンセラー)たちにぶつけられた質問は、精神分析でいう「転移」は哲学カウンセリングでも避けられないのではないか、つまりどんなに努力しようと主観的（？）な要因は残るのではないかという、これまた非常に答えにくい質問だった。モルシュタインは柔らかい口調でそれなりに巧みに受け流していたが、その後マイクを握ったシュスターはあっさり「確かに転移は起こる」と認めていた。もっとも後で他の人から聞くと、彼女はタブーを気にしないタイプらしく、たとえばクライアントがカウンセラーに恋愛感情をもったとしても、カウンセリングを続けてかまわないという考えらしい。

コロキウム終了後、ストプチュク周辺に何人かが居残って、先ほどのディスカッションを続けた。提題者のうち、フスとゲーブラーもやってきた。フスは、「お金は物質化したエネルギーにすぎない。お金を払う人はそういう動機をもっているから払う。それだけじゃないか」と述べた。私は「お金は物質化したエネルギー」という冷徹な名文句にある種の感銘を受け、フスにもインタビューの願望を抱いた。いずれにせよ、ストプチュクさんは「自分を売ることにはためらいがある」の一点張りだった。

この日の午後、催しが行われている最中ではあったが、ストプチュクの了解が得られたので、会場の２階の一角で彼女へのインタビューを行った。哲学について、女性が哲学する事について、あるいは哲学プラクティスについてのストプチュクの明快な考え方については、本号に阪本恭子さんによる書評が載るので、それを参照していただきたい。彼女の話しぶりで私が感銘を受けたのは、学者ぶらないのはもちろんのこととして、表情や、身振り、言葉付き、質問したりこちらの言葉に聞き入ったりする姿勢（文字どおりの身体の姿勢を含めて）などが、とても自然で、攻撃的でなく、それでいて生き生きとしていて、話し相手をもリラックスさせるということである。カウンセラーとしての天分を備えた人だと思った。

また、夕食後は、オスロから来たヘレスタッド（Herrestad）とスヴァレ（Svare）の二人に、気持ちの良い正面玄関脇のベンチでインタビューをした。二人が属するオスロのグループは、２年間の準備期間（無料で相談を受け付けていた）を経て、本格的に哲学カウンセリングを開業するわけであるが、そのかれらが影響を受けた人物・グループ、方法論などについて質問した。方法の点では、強圧的にならないなどの点で実存的な心理学に多くを学んだが、心理学ではなく哲学的なカウンセリングをやるわけは、哲学こそが人々にとって重要だからだという。いままでどのような内容の相談が多かったかと

訊くと、職業、会社（職場）の人間関係、家庭内の関係などで悩んでいる人が多いという返事だった。インタビュー中に、たまたま、かれらがもっとも影響を受けたというオランダ・グループの代表者のひとりであるフスが隣のベンチで談笑しているのを見つけたので、フスにも（短時間ではあったが）インタビューして、ヘーゲル哲学のこと、瞑想の意義などについて聴くことができた。かれは、先ほどのストプチュクとは微妙に異なり、柔らかな、少し疲れたような表情で、相手を包み込むようにゆっくりと語るが、たとえばヘーゲルの思想の独断性などについては通俗的な偏見を共有しているという印象を受けた。

この夜、朝食時の予告通り、他の発表者とともに、アーヘンバッハの自宅兼クリニックに招かれた。地上３階地下１階の建物で、地下がゼミナリウム（セミナー用のスペース）、一階が居間兼クリニック（哲学プラクティス）用スペース、二階および三階がアーヘンバッハの書斎であった。会場であるアカデミーからアーヘンバッハ邸までの往復は、ドイツでも最有力の新聞のひとつであるフランクフルター・アルゲマイネの文化部記者、イェーガー氏の車（新聞社の所有で、社の略称ＦＡＺが車両ナンバーの先頭に来ているのには驚いた。金を払って登録番号を選ぶことが制度的にできるらしい）に同乗させてもらった。かれは北海道大学に外国人教師として赴任していたことがあるといい、日本人女性と結婚して、子どもはフランクフルトの日本人学校にやっている（といっても週末だけだが）と語っていた。帰りには、モルシュタイン女史も同乗したが、昼間のストプチュクの「事件」をずいぶん嘆いていた。砕いていえば、「若い人ってあんな調子なのよね」という態度かと感じた。

３日目（８月５日）

今晩は私の講演を控えているので、いくつかの催しをさぼってその準備をする。大会事務局の規定では、発表は30分を越えてはならないとあったのに、そんな制限に甘んじる人は皆無、ほとんどの講演者は質疑を含んで１時間の枠をまるまるしゃべりまくって、質疑の時間はもはや残らない現状だった。この学会に限らず、私の経験では、欧米の学者は時間制限を基本的にははねとばす勢いで自説を開陳し、執拗に異説を論駁する。ロゴスの活動を制限時間という無粋なもので妨げられることはよしとしないのである。ともかく、愚痴をいっても始まらないので、阪大の臨床哲学についてより詳細に報告することとし、最後に今大会のテーマである「徳」への言及を短いながら付け足す方向で、原稿を拡張した。

しかし、いくら発表の準備に時間を使いたいといっても、重要な講演は聞き逃せない。11時45分からはシュスターの講演があった。マッキンタイヤのナラティヴ（物語）につ

いて。しかし、彼女の話というのは、自分の語りたいテーマを一方的に説き聴かせるというのではなく、ほんとうにインタラクティヴで、つまり聴衆がわかってくれるかどうかを気にかけ、途中で一度話を切って、質問を受けつけるのだった。その柔らかな姿勢には感心した。ただ、彼女の緩やかな英語で繰り広げられる話は、デューイとか、ルソーとか、個々の点は十分に理解できるのだが、全体に山がない感じで、かえって形をつかみづらいうらみは残った。講演後、あらかじめ頼んであったインタビューの都合を聞いたら、今からでもＯＫだというので、講演が行われた部屋にそのまま残り、本間・紀平両君にビデオを回してもらうことにした。

インタビューで聞いたことをいくつかの資料で補足すると、シュスターは南米スリナムに生まれ育って、25歳でイスラエルに移住した。９年前にイスラエルで哲学カウンセリングを開業したが、その前２年は哲学プラクティスをオランダで学ぶとともに、何よりアーヘンバッハ自身から吸収したらしい。イスラエルの新聞と提携して、日本でいえば「いのちの電話」のような「哲学ライン」という名前の電話相談を担当し、実存的な問題や倫理的ジレンマの相談にのっているという。それに加えて、最近は哲学カフェを始めたり（月に一回)、美術館で一般の人を対象に『ソフィーの世界』をテクストとする読書会を開いている。イスラエル哲学プラクティス・カウンセリング協会会長でもある。

午後２時30分からのフスの講演も気になるので聴いた。フスから影響を受けたことを自認しているスヴァレの姿も聴衆の内に見えた。「＜聖なるロゴス＞――哲学プラクティスは倫理的プラクティスである」という題だったが、ハイデガーやネルソン・マンデラなど、口にされる人名はあまり相互に関連がなく、全体として「身体の中で宇宙のロゴスが働いているから、それを妨げることがないよう、リラックスせよ」というメッセージを伝えたいらしかった。哲学カウンセラーである同僚たちに語りかけ、示唆を与えるという態度、つまりメタ・カウンセリングともいうべき態度も目立っていた。具体的には、楽な姿勢や呼吸法をその場で指示して実践させたり、星の図形を描いてその各頂点に自分にとって重要な人（愛憎いずれかの方向で）の名を書き込ませ、何をその人にあげたいか、またその人から受け取りたいかを尋ねたりした。聴衆の名前を一人一人あげていき、フス自身がもらいたいもの、逆にあげたいものを、いちいち述べていった。私にも話しかけてきて（「後ろの方にいる、私が昨夕話をしたプロフェッサー」という呼びかけだったが)、あなたからは柔道のこつを教えてもらいたい、などと言うので、ちょっと表面的すぎないかと疑わしい気分になった。このような個々のテクニックは、心理学的カウンセリングその他の実践で、きっとすでに知られているものだろう。ただ、フスは最後に、自分がこの講演で披露した「エクササイズ」を（固定的な？）技法として使わないようにと、哲学カウンセラーを職業としている聴衆に警告していた。

さて、夕食後８時（ちょっと日本では考えられない時間帯だが）から、私の講演が始まった。発表前に（直前にではないが）コーラを飲む。これは以前、日本、とくに阪大になじみの深いニューヨーク州立大学のチョー教授に教えてもらった＜たしなみ＞である。講演者はコーラを飲んでおくと程良く神経が興奮してよい、ドイツの有名な哲学者もその習慣をもっている、というのがチョー先生の説である。

私の講演はドイツ語で行われた。前述のとおり、英語に同時通訳されてはいたが、一応英語のサマリーを準備した。予想以上に聴衆が多く、用意した英語版のコピーは行き渡らなかったが、特に聴いて欲しい英語圏の人物たちにはあらかじめ個別に手渡しておいた。講演の冒頭には、当然それが欧米人の聴衆の関心を惹くだろうと考えて、阪大の臨床哲学研究会の活動と大学院の臨床哲学というセクションの趣旨について説明した。カウンセリングはやっていないとは、わざわざ断らなかったが、その点は自ずと理解されたようである。鷲田清一氏が日本の哲学界で「臨床哲学」の用語を使い始めたことなども織り込んだ。阪大大学院（現代思想文化学）で勉強しており、夏休みを利用してドイツに一時帰国中のＨ・Ｊ・ペピンさんも、郷里が近くなので聴きに来てくれた。

自分の講演を自分で評価するのはむずかしい。個人的事情もあって短時間で仕上げたため、内容が荒削りであるのは自覚しているが、そのわりには講演後の拍手や感想などから判断して、かなり好意的な反応が得られたと思う。初めての日本からの参加・報告者というお客さん扱いも、もちろん欧米人の主催者・聴衆の心理にはあるだろう。そのことは、講演のはじめに私を手短に紹介してくれたアーヘンバッハが、「日本でも哲学プラクティスが、あるいはそれに近いものが始まった、喜ばしいではないか」というようなコメントをしていたことからも察せられる。しかしともかく、プログラムの組み方自体、つまり他の講演やワークショップと競合する時間帯にではなく、学会参加者のすべてが聴ける（聴くことを期待される）この夜の時間帯に私の講演をもってきてくれたこと自体、主催者の好意的な措置であることは確かであろう。発表が終わって、さあ質疑の時間だと身構えていると、アーヘンバッハが出てきて、次の講演まで休憩だといって、打ち切ってしまった。ほっとしたような、肩すかしをくらったような気持ちで、地下のクナイペ（気軽にお酒を呑める店）に行って、ペピンさんの解説つきで地元ケルンのビールなどを飲む。リンドセットがやってきて、本間君、紀平君、仁平さんとずっと話し込んでいた。システム的家族療法などについて論じていたらしい。後でとくに本間君について、かれはなかなか鋭く強靱な思考力をもっているとほめていた。

４日目（８月６日）

実質的な最終日であるこの日、10時からは前述したオーストラリアのヴァン・フーフ

トのワークショップ「看護における徳とケアリング」、11時30分からはブラジルのデ・スーザ（de Souza）の講演「徳における個人的エクササイズ」、3時30分からは台湾のフレミングの講演「知恵の後（アフター・ウィズダム）」に出る。ヴァン・フーフトのワークショップは、かれがほとんど時間いっぱい一人でしゃべってしまい、聴衆の参加する余地は皆無に近かった。看護を臨床哲学のひとつの重点と考えている私としては（また同じくこのワークショップに出席していた阪大院生らもおそらく）ぜひ質問し、意見を交わしたい点がいくつもあったので、心残りだった。医療系の領域に経験深いリンドセットもこれに出ていて、私の講演との関連をヴァン・フーフトに対して指摘してくれたのに、その指摘を有益な討論に結びつけられなかったという意味でも。あと、ヴァン・フーフトの論点を、ナースが直面する具体的なジレンマの方向に向けて質問をしていたのは、イギリス英語をしゃべる、少し硬い表情の女性だった。看護婦だったが、行き詰まりを感じてやめたらしい。仁平さんは残って彼女と話し、「彼女は怒っている、あんな立場の人はみなそうですけど」といっていた。

昼食のときだったと思うが、アメリカのV・フィアリー（Feary）女史に話しかけられた。彼女はマリノフと組んでASPCPの副会長を務めている。面白いことに、タイの刑務所で哲学カウンセリングをやりにいくと言っていた。その仕事は、しかも、かなり長く続けているらしい。最近では、「刑事犯罪者のリハビリにおける哲学カウンセリングの役割」という論文を書いている。刑務所でカウンセリングというのは珍しいのだろうが、彼女は企業コンサルタントもやっていて、こちらは哲学者の仕事としてアメリカやドイツではふつうだ（アーヘンバッハも企業コンサルタントをやっている）。ただ、企業の仕事は疲れるので、もう手を引き、個人的な仕事がしたいと、フィアリーは言葉を継いだ。かと思えば身体を乗り出して、アジアの国に社員を派遣する欧米の会社が文化の違いに困っているので、あなたたちのところ（というのは阪大のことを意味している）でその相談を請け負ったらどうかとも提案していた。愛想がないのを承知で、それは公務員の職務専念義務というやつとぶつかるかもしれませんね、と答えておいた。そのほかにセクハラ関係の仕事も彼女はしている。

今大会の最後を飾る、あるいは飾るはずだったマリノフの講演は、じつに見物だった。とてもよくとおる声の、しかし早口のかれは、哲学カウンセラーが金を受け取っていいゆえん、心理学的カウンセリングとは違う点などを、自分が会長を務める「アメリカ哲学・カウンセリング・精神療法協会」（ASPCP）の会則を片手に示しつつ、とうとうと説き来たり、説き去っていた。それまでの大会期間中はひどくラフな服装だったマリノフが、ぱりっとしたスーツ・ネクタイ姿に変わって演台に立ったのも、象徴的といえばいえたのかも知れない。ともかく、早口の英語があまり聞き取れなかったうえ、この業界

の過去の経緯やら人脈図やらに疎い私には、しだいに高まってきた聴衆の緊張が感じ取れなかったが、マリノフは明らかに誰か、もしくはどこかの国の協会をあてこすった文言を講演で使った（執拗に？）りしたのだろう。途中でシュスターが「ヘイ」と言いながら手をあげたり、立ち上がったりしていたかと思うと、私のすぐ横にすわっていた男性が大声で「アーヘンバッハ、この原理主義者（ファンダメンタリスト）がしゃべり続けるのを止めさせてくれ！」と叫んだ。モルシュタイン女史を含む少なからぬ人々が賛成の身振りをしているように見えた。もういちどこの男性が叫んだので、それまでは抗議を無視してしゃべり続けていたマリノフもストップし、事務局を代表するトマス・モールス・アカデミーのトメ氏が出てきて、「反対があれば、後で意見交換の場を必ず設ける、ともかく講演者に最後まで話させてくれ」と説得すると、シュスターも含めて（！）ほとんどの人が拍手でこれを迎えた。「原理主義」という批判がマリノフに当てはまるかどうかは疑問であろう。ともかく、発表が結ばれたとき、拍手とブーイングとが半々くらいの割合で交錯していたのは事実である。

後でリンドセットに聞くと、昨年のニューヨーク大会（マリノフ主催）でも同じようなもめ事があったらしい。国際的プレーヤーたちも一枚岩ではないということが、はっきりした。ともあれ、会場の美しい中庭（カトリックの修道女となり、アウシュヴィッツで亡くなったユダヤ系の女性哲学者エディット・シュタインの名を記念する礼拝堂がある）の一角で、対立した当事者たちが話し合いをもっていたようなので、その点では哲学プラクティスの対話の精神が生かされたということなのだろう。大会のその後の模様は省略する。さいごに簡単に、今後の日程をアナウンスしておこう。哲学カウンセリングないし哲学プラクティスのこの国際会議は、来年はイギリスのオックスフォード大学で７月27日から30日まで開催されることが決まった。日本からの参加もより多数に、より多彩になることを私は願っている。